

「だめかもしれない」と覚悟はしていた。もう神様に頼むだけだ。2011年3月15日、東京電力福島第一原発では1、3号機の爆発に続いた。事故発生から5日目の朝のこと。を、当時の所長吉田昌郎(56)は13年7月死去。は側近の部下たちにそう語った。

その日は2号機の格納容器圧力が異常に上昇していた。格納容器が破裂すれば放射性物質が大量に拡散してしまう。構内で事故対応を続けることはおろか、12キロ南の福島第2原発も放棄せざるを得なくなる。

第一、第2原発が制御不能になれば、本県だけでなく首都圏も避難することになるだろう。免震重要棟の緊急時対策本部で本部長席に座る吉田はそう考えていた。だが回避するすべは見つからない。万策尽きて静かに目を閉じ、腕を組んだ。

俺と一緒に死ぬのは誰だ。

吉田は1人の部下を手招きすると、小声で告げた。「最悪の事態が起ころるものもしない。起きているやつだけでいいから、ここを出る準備をするよう言つて回れ」。

あの日から3年、政府が原発再稼働に向けて動く今、史上最悪レベルの原子力災害を目の当たりにした関係者たちが口を開いた。

事故が残した教訓は何か。彼らは何を見て、何を思ったのか。多くの証言でたどる。



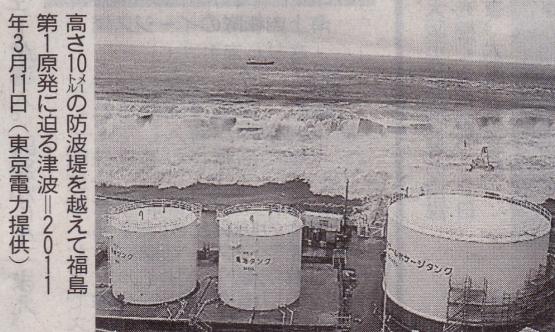
福島第一原発1号機で原子炉建屋の爆発が起きた後、1、2号機中央制御室に残った運転員たち
2011年3月12日（運転員撮影）

最悪の首都圏避難想定

3月11日午後2時46分、福島第一原発事務本館2階にある所長室からは薄曇りの空が見えていた。所長の吉田は11年度の業務計画会議を終えて席に戻ったところだった。午後3時からは原子力部門と他部門の社員の懇親を図る部門間交流会議を控えていた。

揺れは突然、地鳴りとともにやつてきた。びーんと大きく横に揺れた後、どんどん増幅していった。収まらぬ気配はない。

震度6強か、下手したら震度7になるんじゃないかな。運転中の1号機はスクランブル（緊急停止）しただろうか。確認しなければならない



高さ10mの防波堤を越えて福島第一原発に迫る津波（2011年3月11日（東京電力提供））

4号機内ゲートに殺到

ことは山ほどある。吉田は所長室を飛び出した。

「早く出せ」「ゲートを開放しよう」「何やつてるんだ」怒号が上がった。しかしひゲート管

理を委託されている協力企業の社員たちには開放を判断する権限がない

定する。だが今は停電でゲートが開かないのだ。

上田が目を疑ったのは

後だった。港湾内の海水、いで引いていき、海底がになつたのだ。

「何だ、こりや…」

目前に迫る津波

事情を知った東電側の指示でゲー

トが開放され、作業員は一斉に走り出た。もし判断が遅れていれば、多くの作業員が津波の犠牲になつた可能性もあつただろう。

日立プラントテクノロジーの主任監督上田力男（49）が設備に損傷がないか点検を終えてゲートに着いた時は既に、作業員たちの姿はなかつた。

上田は開け放たれていたゲートから4号機を出ると海側を北に約500㍍歩いて、高台に続く「汐見坂」と呼ばれる坂の上り口まで来た。すると先を歩いていた作業員が海を指

線に白波が立つてた。波はあつという間に目の前を高さ9・2㍍の重油

波にのまれ、ふろんごろ

って坂を上がっていくう

きな水柱を上げた。

「私がいたのは坂を上

たちの最後尾です。危な

いといった。〔敬称略〕年

前を高さ9・2㍍の重油

波にのまれ、ふろんごろ

って坂を上がっていくう

きな水柱を上げた。

「何だ、こりや…」

作業員たちの涙

事故の記憶、記録に

目の前の男性作業員は両手を顔に当てておえつしている。男性は東京電力福島第一原発事故の発生時から対応に当たつた一人だ。1号機の原子炉建屋が爆発した時の心境を尋ねると「死ぬだろうと思つてしまつた」と答えた後、言葉を詰まらせたのだ。

男性の脳裏には「これまで家族には一度と会えない」とい

う思いがあつたという。頭の頬む。いろいろと面倒をふ中で何度も何度も小学生の息子や妻への遺書をどう書くかを考えていた。「こんな結果になつてしまつたが、たくましく生きてくれ」「母と息子をひどいことにならないよ